

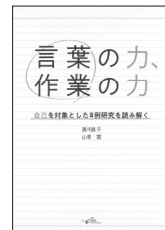
濱中直子, 山根 寛 (著)

言葉の力、作業の力

—自己を対象とした事例研究を読み解く—

夏 莉 郁 子

(やきつべの径診療所, 医師)



私と濱中直子さん(Hanaさん)との交流は、ある学会での私の講演をHanaさんが偶然聴いたことから始まる。彼女から届いた感想の手紙には、「若い人にとっての『のんびり休みなさい』は、時に残酷な言葉」と語った私の話に共感したと書いてあった。

私が語ったことは、当事者としても治療者としても本音だった。

医学生時代から精神科に通院していた私が、「いつ治るのか?」と出口の見えない中でもがくように主治医に尋ねても、返ってくるのは「そう焦らずに、のんびりしなさい」という言葉だけだった。では、自分が治療者となり、診察室で気の利いた答えが言えるかというと、同じ言葉を繰り返すしかなかった。身体療法と精神療法のみの治療の限界を、突きつけられる思いだった。

本書で笠原 嘉先生が「早く治すというより、患者さんが今後の生活史を築き上げていくにあたっての手助けをする」と述べられているが、これは「のんびりしなさい」と同じようでもまったく違う。「人生をこれからも歩み続ける一人の人」として患者を尊重しているのだ。こうした考え方こそが、患者だけではなく医療者を、そして「精神科医療を回復」させるのだが、残念ながら現在の医学教育にはこうした教えはない。

当院ではデイケアはあるが作業療法は行っていないので、作業療法が回復に与える影響を実際に学ぶ機会が私にはほとんどなかった。本書は、作業療法の治療効果、身体療法や精神療法との相互作用について、初歩的な説明から専門的な内容まで山根 寛先生の丁寧な文章で記述されている。そこにHanaさんの体験の経時的な記録が同時進行しており、読み手自身がまるで作業療法を実際に体験しているかのような「生活感」、「現実感」を味わうことができる。本文中に何度も出てきた「パラレルな場」の治療効果は、デイケアや集団療法では得られないものである。「パラレルな場」の保証のもとで「ものをつくる」という実験が合わさると、人の内面はどのように変わっていくのかと目を見張る思いだった。

本書に書かれた作業療法のスピリットは、治療に行き詰った専門家に大きなヒントを与えるものである。

そして、本書は「当事者」としての私にも大きな意味を与えてくれた。

私は当事者と治療者の2つの立場をもち、母親が統合失調症だったので家族の立場でもある。

講演するときは、母が手づくりして自ら着用していたスーツを着て話をする。50年前の骨董品の

ようなスーツである。

私が幼いころ、放蕩した父親は家に給料を持ってこず、家計は困窮していた。洋服が得意だった母は、嫁入り道具として持参した着物をほどいて外出用のスーツをつくった。子どもの私は、母が瞬く間に素敵なスーツをつくり上げるのを感じて見ていた。母はその後、症状が進行し精神科病院へ強制入院となったので、「スーツをつくる母」は、私の記憶の中で唯一の母親らしい母の姿だった。愛人宅から帰りぬ夫を待ちながら手縫いしたスーツは、苦しみの中で生まれた母の「作品」であり、生き様である。精神症状が母娘の間に壁をつくってしまったが、母の服に袖を通すたびに、この世では縁の薄かった母との距離が縮められるような気がする。

1人のOTの方が、母のスーツを着た私を見て、「僕は、夏莉さんのその服に作業療法の原点を見ました」と言った。そのときは意味がよくわからなかったが、本書を読んで謎が解けた。母の生き様を現わした作品が、50年の時を経て、現代に生きる私を回復に導いている。

〔 A5判 174頁 2,500円+税
シービーアール 刊
☎ 03-5840-7561 〕